

開催地名：和歌山県和歌山市	
開催日時	令和5年1月15日（日） 13：30 ～ 15：20
開催場所	和歌山城ホール
語り部	瀬戸 元 （岩手県釜石市）
参加者	市民、自主防災組織 66名
開催経緯	<p>当市では、南海トラフ地震の影響を大きく受ける地域に位置しており、広範囲に及ぶ津波の被害が想定されている。そのような状況の中、東日本大震災から年月が経過し、津波に対する意識が低下してきている。</p>
内容	<p>（１）はじめに</p> <p>過去の失敗から反省すべきことや改善すべきことを語り継いでいくことは、未来の命を守るためにはとても重要である。そしてその使命は私たち、そして皆さんが担っているということを、まずは認識していただきたいと思う。</p> <p>（２）災害時の心得</p> <p>岩手県釜石市両石町はリアス海岸のため、高い津波の常襲地である。江戸末期から今回の東日本大震災までの約160年の間に、4回の津波によって町が壊滅しているが、それでも先祖は町を復興してきた。そして2011年、東日本大震災の津波によって、釜石市北部の私の住む地域では、230世帯中高台の8軒のみしか残らないという壊滅的な被害を受けた。震災前には680人いた人口は、現在は120世帯、300人弱となっている。釜石市全体でも、震災前は約4万人いた人口が、現在は3万人弱にとどまっている。</p> <p>災害のとき一番大事なのは、まず自分の命、次に家族の命である。自主防災組織は、避難しろという声掛けだけで良い。住民を助けに行っても自分が犠牲になることもありうる。もし間に合わないときには、見捨てるしかない。消防団、警察、福祉関係者、介護者には、他人を見捨てることができなくて、一緒に亡くなった方、巻き添えになった方が少なくない。限られた時間までは手を差し伸べるが、それ以降は逃げなければならないという、その地域の避難についての規則が周知されているべきだった。私の地域では、15分たったら一斉に逃げる15分ルールというものが決まっている。消防団や警察にも、皆家族があるからだ。</p> <p>子どもたちに「避難」という防災能力を植えつけるべきである。防災教育を終えた子どもたちが大人になったとき、皆同じような考えを持って、「逃げよう」と言ったら逃げるようになる。実際に釜石市の子どもたちは「100回逃げて、100回津波が来なくても、101回目も逃げよう」という新しい教訓を生んだ。避難するときには、他人に注意を喚起する言葉を発しなくてはならない。そして避難したら、安全が確認されるまで絶対に戻ってはならない。私にとって、震災のとき統率や安否確認に役立ったのは、強く大きく声が出るハンドマイクだった。私が防災指導をしている釜石東中学校の生徒たちが、住人が家屋から避難済みかどうかを示すための安否札を作り、震災の前年に避難弱者の家に配っていたことも震災時には役立った。</p>

(2) 避難所運営に関すること

避難時、何が一番困ったかというトイレの問題である。トイレの環境が整っていないと、寒さが増すとともに体力も落ちてくる。特に年配者は、腰が痛んで和式トイレが使えないので、ビールケースの底を四角く切り、仮設トイレの便器にそれを被せて使ってもらった。震災後、私は町内会長としてトイレトイレットペーパーを備蓄した。600人が3日間使用することを考え、必要な数量を購入した。

次に困ったのは暖房である。東日本大震災の教訓を活かし、震災後は暖房器具等を備蓄した。災害時に何が起こるかをイメージして事前準備しておくことは非常に大切である。例えば、水にぬれた体をふくだけでなく、首に巻いて寒さをしのいだりすることもできるタオルは、災害時には非常に役に立つ。避難する際には必ず数本を持参していただきたい。

(3) 最後に

私は防災力とは、意識力であり、イメージ力であり、そして備える力であると思っている。まず意識力とはなにか。意識力とは災害と向き合う姿勢、心構えである。イメージ力とは災害を想定した対策のことである。それから備える力とは、日頃の防災活動のことで、避難訓練や避難弱者の救護を含んだ自助共助のことである。詳しく申し上げれば、災害を意識することとは、災害と向き合う姿勢、いわゆる危機管理意識のことである。その意識とは災害の予兆にもつながるはずだ。常に災害と向き合う姿勢を持つこと、そして災害を想定した対策を講じ、避難訓練や備蓄品を準備することが我々には必要である。



開催地より

東日本大震災の体験談をベースに、津波の恐ろしさ、災害時の心得や避難所運営についてお話しいただいた。当市としては本講演をふまえ、自主防災組織の育成、強化と推進していくとともに、避難所運営方法の普及、啓発に取り組んでいく所存である。